



地域によって異なる 人々の生活や考え方、 宗教等を尊重し、 主体的に過ごしたことが 今に活きている。



国連大学

女性会計士 Kさん (K・K)

1993年東京大学法学部卒。大学卒業後に結婚、2児出産後、1999年公認会計士二次試験合格。1999年に朝日監査法人(現 有限責任あずさ監査法人)に入社し、国際部に勤務。米国に2年滞在後、グローバル企業や外資系企業への勤務経験を経て、現在は国連大学に勤務。

大学卒業後、結婚～出産を経て公認会計士資格取得から社会人としてのキャリアをスタートさせたというKさん。家族での渡米、事業会社での勤務経験を経て、現在の国連大学での仕事に至った経緯やその道程、仕事の魅力について伺いました。

公認会計士資格取得が 社会人としてのスタート

—自己紹介と公認会計士を目指したきっかけをお話いただけますか？

大学卒業後、結婚し2児の出産を経て1999年に公認会計士二次試験に合格しました。女性が長く働き続けるためには専門知識と資格が必要だと考えていたものの、大学の専門課程で法律を学ぶうちに、自分は法曹の仕事ができるほど法律に興味を持ってない、と感じるようになりました。その一方で、会計の知識はどの企業、さらにはどういった職種でも必ず必要とされるはずだと思い、会計士資格の取得を決意しました。子育てをしながら勉強を続けるのは時間もかかり決して容易ではありませんでしたが、いつかは必ず合格できると思っていました。

—監査法人に入所されてからのお仕事についてお話しいただけますか？

1999年、2児の母として当時の朝日監査法人(現 有限責任あずさ監査法人)に入社し、国際部(アーサーアンダーセン)に配属されました。当時は子どもがいる監査スタッフは極めて少なく、他のスタッフに比べて限定的だったものの出張や残業もあり、働く時間を確保するだけでもエネルギーを要しました。監査の一環でクライアントの業務フローの理解に努めるうち、いずれは事業会社で内部統制の改善に直接関わりたいと思うようになりました。3年ほど経った頃、夫のアメリカ留学が決まりました。英語環境で暮らすまたとないチャンスだったので、退職も前向きにとらえ、三次試験の合格を見届けてから家族で渡米しました。

—若手会計士の方々と、海外駐在やグローバルな仕事に従事することにためらいを感じる大きな要因が言語の壁となっています。渡米される際は、どのように英語を学習されましたか？また、渡米前はどの程度英語を話せましたか？

学生時代の勉強のおかげで読み書きについては特に問題はありませんでした。会話は全くできなかったため、事前に基本的な会話の例文集を買って付け焼き刃的に練習しました。渡米した当初から買い物や、子どもの学校で先生と必要最低限の言葉を交わすなどはできましたが、予めもっと会話の練習をしておくべきでした。語学の上達には特別なコツなどなく、単語を覚

える、文法を学ぶ、音読をする、独り言をつぶやく等、地道に続けるしかないと感じます。また、趣味が身を助けてくれます。楽器を持参しサークルやスクールに参加するなど、共通の趣味を通じて交友関係を広げた友人もいました。

主体性がカギだった アメリカでの暮らし

—アメリカでの生活はいかがでしたか？

住んだのは中西部にある大学を中心とした街で、住民の多くは大学関係者や学生、自動車産業の関係者でした。治安は極めて良く、外国人留学生や駐在者も多かったため日本人が暮らしやすい環境でした。現地での経験を帰国後のキャリアに少しでも活かしたいと考え、子どもの通う学校でボランティアをし、日本語を勉強している大学生に声をかけて日本語と英語をお互いに教えあい、会計の勉強会を企画するなど、主体的に過ごしました。私も子どもたちも友人に恵まれ、楽しい2年間を過ごすことができたので、帰国してから15年が経ちましたが、いまだに家族で当時を懐かしんでいます。

ーアメリカで特に印象に残ったことや日本との文化の違いを強く感じたことはありますか？

アメリカに到着して早々大規模な停電に見舞われましたが、慌てる私たちをよそに同じアパートの隣人たちがのんきにプールで泳いでいるのを目にしたときには気質の違いを感じました。子ども連れで初めてバスに乗ったとき、小銭がなくて困っていたところ見知らぬ青年が黙って代わりに払ってくれたこともありました。地域により文化や慣習は異なりますので、事前に知っておくべきことを問われても特定の経験を挙げることはできませんが、どこであれ、おおらかに構えてそこで暮らす人々の生活様式や考え方、宗教等を尊重し、自らその地のイベントを楽しむと良いと思います。私は友人宅のサンクスギビングの集まりやハロウィン、インド人カップルの出産祝いのパーティー等、機会があれば積極的に参加し堪能しました。また、子どもの学校の友達には移民も多かったことから、自然と様々なバックグラウンドの方々を知り合うことができました。最も親しくなったママ友は故郷のインドネシアで宗教上の理由から大変苦労した末、アメリカへ移住してきた人でした。他方、会話のネタとして私は着物や浴衣、風呂敷や折り紙の本を持参しました。月並みですが、日本の文化を英語で説明できるよう準備しておくとお話がスムーズになります。また、向こうではたいてい持ち寄りパーティーに参加する機会があるので、定番料理などを予め決めておく慌てずに済むと思います。

興味深かったのは、学校教育制度です。外国人の生徒をサポートする数々の仕組みがあり、子どもには英語が第2外国語である生徒向けの授業や、英語が話せる日本人スタッフのサポートがあったほか、有志の先生や保護者が開いてくれる懇親会で親も相談に乗ってもらうことができました。学校では時折、生徒も家族も民族衣装を着てそれぞれの国の食べ物を持ち寄るイベントも開催されていました。これは、生徒のバックグラウンドの多様性を表すものだと思います。また、当時ちょうど大統領選が行

われており、全校生徒が模擬投票を行う一大イベントを催すなど、学校が意識づけのために工夫していたことも印象的でした。

ー帰国されてからのお仕事についてお聞かせいただけますか？

帰国後は米国系のグローバル企業の経理部へ入りました。その企業のマネジメント手法は世界的に高く評価されていたこともあり、入社前は働くことを楽しみにしていましたが、大組織の中での限定的な職務や事業内容に興味を持てなくなり、当時精神的な支えであった書籍と関連サービスを扱う外資系企業へ転職しました。マーケティングスタッフとして売上の予測資料の作成、営業支援、イベントの開催やその効果測定などに携わり、経理とは異なる経験を積むことができました。前職ではエクセルスキルが低かったため苦労しましたが、そこで習得に努めた甲斐あって転職後は相対的にエクセル操作が得意な職員になっており、日々工夫する楽しさを感じながら働くことができました。その一方で、会計や管理上の問題点が気になり立場をわきまえずに改善提案をしてしまうなど失敗もしました。たとえ正論であったとしても、組織に認めてもらわなければ意味がないので、効果的なコミュニケーション方法を強く意識するきっかけになりました。また、売り上げと営業担当者至上主義の組織で自分の存在意義がわからなくなることもあり、自分の強みである会計分野から離れてキャリアを築くことに限界を感じるようになったところ、転職先として経理職のご紹介をいただくようになったことから、会計分野に戻ることにしました。

経理と税務の実務を経験すること、英語を使うことを目標に、外資系企業をクライアントにもつ会計事務所に転職しました。バックオフィス業務全般に加えて英文アナニュアルレポートの作成、連結財務諸表の作成プロジェクトなども担当し、日々手を動かすことで知識と経験が確実に蓄積されていきました。ミスを防ぎながら効率的にマルチタスク業務をこなすというバックオフィスの基本動作がその後活かされるこ

とになったと思います。この時期、USCPAの勉強を始めました。会計の基本を学び直し、会計分野の英語表現を学ぶこと、転職に活かすことが主な目的でした。また、学習を続ける親の背中を子どもたちに見せる意図もありました。勉強に伴う負担と疲労は予想以上で、中年以降の記憶力と体力の衰えを痛感しましたが、その分合格した時の喜びは大変大きいものでした。

ー国際機関である国連大学に転職をされた理由や国連大学でのお仕事についてお話しいただけますか？

きっかけは転職エージェントによる紹介で、事業目的が自分の価値観と合っていたため興味が湧きました。国際機関でありながら本部が日本にあるためトップマネジメントと共に働けること、小規模なので自分自身の裁量と貢献が明確であること、職場環境が多国籍多文化であることに魅力を感じました。国連大学本部のバックオフィスチームはマレーシアにあり、上司も経理部の同僚も海外にいる状況下、私は日本における経理全般の責任者として支払いを始めとした各種会計関連の承認業務を行うことになりました。その後、経理業務を可能な限りマレーシアに移管し、日本における処理は最小限度にとどめつつ購買や出張手配、人事関連のサポートも含めたバックオフィスのチームを統括する流れとなり、今に至ります。国連大学は発生主義を前提にしたIPSAS(The International Public Sector Accounting Standards)という国際公会計基準に準拠していますが、多くの職員が重視するのは現金主義に近い予算会計です。着任時はIPSASの適用直後だったので勘定科目には意味があることや、予算とは異なる費用の計上時期の重要性を職員に理解してもらうところから始めなくてはなりませんでした。正しい処理をお願いしても現場のスタッフから「今まではそれで問題なかったのに」と反感を買うこともあり、ルールの趣旨とミスや不正を防ぐための仕組みについて、度々説明することになりました。時には、海外のファイナンスオフィスの指示に対する現場の不満を受け

止め、板挟みになりながら仕事を前に進めなくてはなりません。日本のオペレーションの現場に即したルールや業務フローを考え、チェックリストやテンプレートを作成したり、それまで手作業で行っていた業務をエクセルなどで自動化するなどの工夫も重ねました。最近、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う自粛要請により、バックオフィスとしての対応に追われています。署名を電子サインに変更するなどペーパーレス化やそれに伴うマニュアル作りなどにも取り組んでいます。

—国際機関で働く面白さややりがいについて教えてください。

国連大学は14カ国に拠点を置いているほか、他の国際機関とも連携しています。世界中にいる同僚やパートナーたちと協力し合えることに喜びを感じています。入社初日からマレーシアで2週間の研修を受けた際には、会計という共通のバックグラウンドがあるおかげで予想よりスムーズに会話ができ安堵しました。この研修中、若手のインド人の同僚と懇親会の場でドリアンを食べながらおしゃべりをし、同年代の中華系の同僚とは夕食をとりながら教育事情について話したのは楽しい思い出です。同じオフィスの中で異なる民族、宗教、生活様式を持つ職員がうまく共存しているところに豊かな多様性を感じました。

2018年には調達購買の海外研修に参加しました。参加者の出身国はマレーシア、カンボジア、ミャンマー、インドネシア、イラクにネパール等多彩で研修は大変充実したものになりました。グループワークで各チームがそれぞれ経験した調達の例を挙げて設問に答えた際には、戦車、難民キャンプの蚊除けの網付きテント、島を巡るスピードボートなどが例示され、日本で働いている身としては驚きの連続でした。

監査の仕組みは特殊で、3カ国からなる監査団が順に任命され各国連組織に派遣され監査を行います。現在国連大学はチリのチームの監査を受けています。監査チームは毎年2～3週間東京に滞在するので、時にはトラブルに見舞われながらも監査



が終了する頃にはお互いに親しみが湧き、一緒に記念写真を撮ることもあります。監査の進め方も雰囲気も国とチームにより大きく異なります。インドチームは依頼事項が多く、監査部屋へ何度も足を運ぶうちカレー味のお菓子を勧められたことがあります。また、完璧主義のドイツチームの指摘の数々に感嘆させられたり、おしゃれな女性ばかりのチリチームと監査の合間に談笑したりとそれぞれが得難い経験です。

—国際機関で働くにあたって大切なことは何でしょうか？

偏見なく、様々な国籍やバックグラウンドの人たちを尊重し、一緒に働くことを楽しめることが大切だと感じます。さらに、柔軟性と視野の広さ、寛容さが必要です。色々なタイプのスタッフがいて想定通りに事が運ばないことや、社内の仕組みが日本の大企業のように整備されていないことはよくあります。仕組みや環境が完璧でないのは当たり前なので、批判に時間を費やすのではなく、どうすれば目的を達成できるのか、全体最適を視野に入れながら現実的な方策を考え提案し、実際に実行する力が求められると思います。更には、ほぼ全ての職員の雇用形態が有期雇用で、実績を組織に認めてもらうことによって契約を更新する仕組みなので、自分の働きが組織にとっ

て意義があると示す積極性も必要です。英語が公用語なので、言うまでもなく語学力は非常に重要です。また、国際機関は学歴主義の傾向がありますが、必ずしも日本国内で偏差値の高い大学が有利という訳ではありません。マネジメントポジションに就いて活躍するためには、修士以上の学歴があったほうが良いでしょう。

国際機関における 会計士資格の有用性

国際機関といえども資金を集め運用し、職員を雇用し財やサービスを購入して支払いをしているので、経理・人事・購買といったバックオフィス業務は必要です。公費を扱うため予算管理や内部統制は一段と厳しくあるべきですが、無駄なコストや手間を排除するための効率性も重要です。会計士はそれらの問題解決に必要な素養と経験を備えていると期待されます。私が応募したポジションは会計士資格を応募要件としており、監査法人や事業会社での勤務経験も評価されました。

—国連大学はどのような活動をされているのでしょうか？

国連大学は1973年の国連総会において、研究、大学院レベルの研修及び知識の普及に携わる学者・研究者の国際的共同体として設立された研究機関です。研究テーマは現在以下の3つを柱にしています。

•Peace and Governance

•Global Development and Inclusion

•Environment, Climate and Energy

研究結果は、主に学術出版物及び政策関連出版物や一般公開イベントを通じて発信されています。また、大学院学位プログラムを含む専門的な研修も提供しています。本部は東京青山にあり本部職員のうち約半数が外国人です。また現在14カ国に拠点があります。

—国連大学に勤務する前と後で、国際機関で働くこと(イメージ)に何かギャップを感じたことはありましたか？

現職は日本、しかもバックオフィス勤務ということで、さほどこれまでの経験とかけ離れてはいませんでした。勝手な思い込みで硬直的で融通の利かない組織なのではないかと予想していましたが、実際はそのようなことはなく、小規模であるためか日頃から業務改善が推奨される柔軟な組織です。それから管理職を含め職員にワーキングマザーが多いことが挙げられます。特にマレーシアの経理部のオフィスで働く職員のうちほとんどが既婚女性で子どもがいる人が少なくありません。仕事熱心ですが休みもきっちりとりまします。驚いたことは2013年の入社当時、小切手が頻繁に使われており、タイプライター、カーボン紙が現役だったことです。さすがに今では使われていませんが。

—今後のビジョンをお聞かせいただけますか？

子どもたちも社会人となり、自分自身のキャリアも終盤に差し掛かってきました。価値観に沿った生き方をして、少しでも社会に貢献でき収入を得られれば幸せだろうと思います。できれば定年後も働き続けたい

ので、そのための準備を始めたいです。世界各国の街を巡りながら、それぞれの街で短期間暮らすことにも憧れがあるので、健康に気をつけて語学の勉強を続けていくつもりです。

—ありがとうございました。最後に、公認会計士を目指す学生にメッセージをお願いします。

会計士資格は幅広い分野で活かすもの。興味のある分野で、会計を足掛かりに様々な可能性に挑戦していただきたいです。そしてどの分野であれ、容易には代替がきかない日本の会計の専門家としての優位性を十分に活かすことの重要性を伝えたいです。今後経理業務を含め事務作業の多くが労働コストの比較的安い地域に移管される流れが加速すると思われるからです。しかし、長期的には世の中がどう変化していくかは分かりません。アンテナを張りながら、その時々与えられたチャンスを活かして、精いっぱい働くことが次のステップにつながると思います。私も自分のキャリアを振り返ってみて、良かったことも辛かったことも含め全ての経験が色々な形で今の仕事に役立っていると言えます。

このインタビューは2020年5月、メール等を通じてまとめました。



〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際グループ)
<http://www.hp.jicpa.or.jp/>